



### Profile

1990年法学部新聞学科卒業。  
環境プロデューサー。本学卒業後、自然食品などを扱うGAIAに勤務。2014年、市民エネルギーちば合同会社(現 株式会社)を立ち上げ、ソーラーシェアリングによる発電所を千葉県匝瑳市に開設する。関連会社として設立した株式会社TERRA、株式会社ソーラーシェアリング総合研究所の代表取締役を兼任するほか、株式会社匝瑳おひさま畑、株式会社Re 取締役などの肩書きを持ち、幅広く事業を手掛けている。



有機栽培した大豆や麦を原料に飲料や味噌を作り、  
6次産業化にも着手

これまでこの場所は耕作放棄地だった。痩せた土壤で収益性が低く、そんな環境でも育つタバコの農家が多くなったが、その需要が減るにつれ放棄されていった。

地球温暖化抑制のための太陽光発電所を造りたい、土地を再生させたい、地域を活性化させたい。さまざまな思いを抱き、東さんたちはこの土地を借りて市民発電所造りをスタート。試行錯誤を繰り返し、発電設備を少しずつ増やしていく。同時に、パネルの下の土地を農地として再生させ、大豆や麦などの作物を有機農法で栽培。農業経営を法人化した子会社を設立し、売電収入を活用して農業を支える仕組みを作った。こうして荒れ果てていた土地は豊かに復活し、自然エネルギーと有機野菜、雇用も生まれ出すようになった。

これまでの

### 不耕起栽培にも取り組み カーボンマイナスを目指す

元々この場所は耕作放棄地だった。痩せた土壤で収益性が低く、そんな環境でも育つタバコの農家が多くなったが、その需要が減るにつれ放棄されていった。

東さんたちはこの土地を借りて市民発電所造りをスタート。試行錯誤を繰り返し、発電設備を少しずつ増やしていく。同時に、パネルの下の土地を農地として再生させ、大豆や麦などの作物を有機農法で栽培。農業経営を法人化した子会社を設立し、売電収入を活用して農業を支える仕組みを作った。こうして荒れ果てていた土地は豊かに復活し、自然エネルギーと有機野菜、雇用も生まれ出すようになつた。



ソーラーシェアリングとは、農地の上部空間に太陽光発電パネルを建て、太陽光を農業生産と発電とで共有するシステムだ。

東光弘さんは2014年に初めて千葉県匝瑳市にソーラーシェアリングの施設を造り、さまざまな企業と提携も進め事業を拡大しながら電気と農産物を送り出してきた。

それは地域を再生するだけでなく、世界を変えようとする取り組みだ。

「イメージは森の中の木漏れ日です。地面を覆う太陽光パネルとは違って、気持ちがいいでしょう？ 人間も生物だから、気持ちのいいものは環境にもいいんです」と東さんは言う。ソーラーシェアリングは日本発の技術。東さんが師と仰ぐ長島彬さんが、農機具メーカーを定年退職後の2005年に発案した。適切な量を超える光は光合成に使われず、植物にとって有害無益であるという「光飽和点」理論に基づき、農場に太陽光パネルを設置することで、太陽光を作物と発電で分け合うというものだ。農林水産省も「營農型太陽光発電」と呼んで促進し、現在では全国で3000件以上が動き始めている。

化石燃料に頼らないエネルギー確保のために太陽光発電所を造りたいと考えていた東さんは、環境に負荷をかけず、農業にとつても有効なソーラーシェアリングに取り組んでいます。匝瑳市に移転した後、1台機を設置した匝瑳市に移転した。

これまでの木漏れ日のように地を照らす

8年間で合計2・7メガワット、800軒分の電力を供給できる施設を造ってきたが、新会社「合同会社匝瑳おひさま発電所」の事業として、その累計と同規模の発電所を新たに建設中。2023年2月に通電する予定だ。

さらに、「耕さない農法」「不耕起栽培」にも取り組んでいる。土には多くの炭素がある機物として蓄えられており、耕さないことで土壤中に二酸化炭素を貯留することができる。また、土壤生物の多様性を保つことは、質の良い作物づくりにもつながる。

「発電を化石燃料から太陽光にシフトすることでCO<sub>2</sub>の排出量を減らし、パネルの下の農地では、作物の光合成によってCO<sub>2</sub>が減る。さらに不耕起栽培によって土壤にCO<sub>2</sub>を貯留して固定化する。空中、地面、地中の三層で、カーボンマイナスを実現しているんです」

ソーラーシェアリングは、複合的に温暖化ガスの抑制に寄与しているのだ。

## 10代から環境問題に关心 転機は東日本大震災



建設中の発電所のパネル。裏側も発電でき反射光や散乱光も拾うので発電効率がアップしている。幅は35cmほどだが、さらに細い20cmほどのパネルも実用化目前だという

高校時代から環境に興味のあった東さんは、本学を卒業後、環境問題に関わろうと考えていたが、それができる企業はまだ少ない時代だった。そこで視野を広げ、24歳の時、東京・お茶の水にある自然食品などを扱う店に就職する。店舗を任されると、「環境にいいものを売る」というコンセプトで、食品だけでなく、当時日本に入り始めたばかりのオーガニックコットンや自然素材の石鹼など、さまざまな商品を販売。夢中で働き、爆発的に売り上げを伸ばした。

その後独立し、千葉で同様の店を営んだが、東日本大震災が転機になった。

「それまでもエネルギー問題に取り組みたいという考えはあったのですが、原子力発電所の事故が起きて『間に合わなかつた』と悔しく思つたんです」

震災があったその日の午前中に、再生可能エネルギーの固定価格買取制度が閣議決定されたことも契機になり、本格的に自然エネルギーに取り組もうと決心した。

それから8年、ソーラーシェアリングに

よって匝瑳市は変わり始めている。市民がパネルを購入するパネルオーナー制により、発電事業はまさに地域の人々が支えるものとなつた。さらに、ソーラーシェアリングの収益をいかに地域に還元するか話し合う「豊和村つくり協議会」も設立され、行政から学校、民間団体や個人まで参加。東さんの活動は着実にこの地域に根付いてきた。

付いてきており、2019年の台風15号では一帯が停電する中、無料で開設した充電ステーションを近隣の人々が利用する景観も見られた。パネルの下で農業に従事するのは、地元の農家の人が中心だが、新規の就農者も移住していくようになつた。ソーラーシェアリングの下で農業をしたい人たちと、発電事業者をマッチングする事業にも着手している。これまでの農家は「農産物製造業」だったが、これからは「農村経営業」に定義を変えたいと東さんは話す。



2022年11月には、3年ぶりに地域交流イベント「ソラシェア収穫祭」が開催され、収穫体験や音楽ライブ、出店などでぎわった。会場となったのは発電所が立ち並ぶ一角。以前は不法投棄の山だった場所だ

## 匝瑳をモデルケースに 日本各地、そして世界へ

「太陽光発電と有機農業の複合による地域再生がここでうまくいけば、これをモデルケースとして全国で実践し、地方から日本が変わってほしい。そして日本から世界が変わってほしいと思っています」

世界を変えたいという思いは、決して夢物語ではない。手掛ける事業はさまざま広がりを見せていく。エネルギー関連の大企業、世界的衣料品ブランドなどと提携した発電所が既に建設され、稼働している。ビルの屋上庭園やエアコンの室外機の上にソーラーパネルを設置する「東京オアシス」という構想もあり、将来は世界中の都市に展開したいと考えている。

「ゼロから1にするモデルを作ることが僕の仕事。大きくするのではなく才能がある人に任せます。自分が生きているうちに、日本を自然エネルギー100%にすると決めているので、プラスと思うところとは全部つながる。それが『日大魂』ですよ(笑)」

環境問題に世界中が注目する今は「順風なので止まつても進むから、楽だよ」と笑いつつ、「日本大学の学生さんにはぜひ環境問題に関わってほしい」と力を込める。地球の未来を考え続けてきた東さんだが、思い描く自身の将来の姿は、意外でもあり、悲願の農家になろうと決めています。

N person  
ソーラー シェアリング



## グローバル企業とのコラボレーション

市民エネルギーしばには、環境問題に積極的に取り組む異業種の企業から熱い視線が注がれている。アウトドア衣料品のグローバル企業であるパタゴニア(本社：米国)は、環境問題への積極的なコミットで知られるが、パタゴニア・インターナショナル・インク日本支社は、2018年から市民エネルギーしばに投資を始めた。現在はここで発電された電力を国内最大規模の直営店であるパタゴニア渋谷ストアに運び、消費電力の多くをまかなっている。社員の意識向上のために現地訪問も実施している。

ロンハーマン(株式会社ザザビーリング)とのコラボレーションも2021年秋にスタート。バッグ、アクセサリー、衣料品、飲食店経営などを手掛ける同社は、ソーラーシェアリング施設「ロンハーマン匝瑳店」を立ち上げ、作られた電力をロンハーマンの各店舗へ供給、有機農業も行っている。

2022年にはカナダグース(本社：カナダ)も参入。株式会社カナダグースジャパンが出資して「カナダグースソーラーパワープラント」をこの地に設立。カナダグース千駄ヶ谷店の年間消費電力の60%をここで発電する予定だ。

カーボンニュートラルを実現する時期を明言し、本気で取り組んでいる企業は、東さんの取り組みに未来への道筋を見つけたようだ。